

「先生、このような時代には、もう朝や夕といったものは存在しなくなるのしょうか」——教室の後ろのほうで誰かが声をあげた——

「君たちはどう思うんだい？」——先生は尋ねた——

「こういう時代には、人は二重の時間を持つべきだと思います。普遍的な時間ともう一つの時間とをです。こんな時代でもやはり朝が来たら、朝が来た、という感慨があります」——誰かが足をぐらつかせながら懸命に答えた——

「すばらしい答えだ」——先生はそう言った——

僕には黒い記憶があります。非常に黒い記憶です。それがあるとすべてが駄目になるような漆黒の記憶です。黒は不思議な色です。それは真に黒に触れた人間にしか知ることはできないでしょう。他の色を混ぜても決して黒を本質的に変容させることはできない。黒はたとえ緑には決して変わらない。黄色がひよんなことから緑に変わるようなことは黒には起こり得ないのです。黒にはそういう免罪はありません。物心ついた頃、僕の前にはすでに黒がありました。僕はそれが世界だと信じていたのです。いや、今から思えば本当はそうではなかったのかもしれない。僕

は黒以外の色が他にあることを心のどこかで薄々感づいていて、あの選ばれなかった者だけがぼんやりと見やる秋の白々しい曇り空のように、白濁した重苦しい嫉妬を次第に憎悪に転じていったのかもしれない。

僕にはわかりません。僕はなぜ僕の半生で黒に触れねばならなかったのか。なぜ僕の体からとめどなく黒い血が流れ出たのか。僕のようにちっぽけな存在に与える道などそれしか無かったのかも知れません。けれどそれはあまりに残酷なことでした。あまりに欲深く、そしておそらく僕自身の卑小さゆえにあまりに美しい理想を抱きかかえて、僕はたしかにこの世に生まれました。

僕は黒に触れ、その奥深くまで無防備にも全身を浸し、何も見えぬままにそれを貪り食いました。僕はそれを望んでいたのではなかった。貪るたびに僕はそれが自分が欲していたものでないことを臓腑が腐る思いで痛切に味わいました。苦しく孤独で穢れた闇の中に僕はいました。それは巨大な鉄鍋のようにどうしようもなく熱く妖艶な闇だった。焼ける喉から絞り出された叫びはどこにも届かなかった。叫ぶ

たびに肉体の奥底に流れる血脈は破れ、血と汚物を否応なく吐き出しました。僕は孤独だった。僕を見てくれる人はいなかった。僕の心は膿んでとめどなく血を流し、あまりに何かを欠いていて、何を欠いているのかすらわからなかった。魂に刻まれた貪欲な欲望は、傷跡となって僕をさらなる闇へと執拗に誘いました。その渴望ゆえに僕は腐った底なしの沼へ自らその貧しい身を沈めていったのです。

僕は、ただ深く抱きしめて欲しかった。決して離さず抱きとめて、この肉体と魂のすべてを静かにゆっくり包んで欲しかった。膿んで腐って匂いを放つ僕の肌に躊躇しないで触れてほしかった。誰よりも深く愛してほしかった。そして僕のすべてを信じてほしかった。今から思えばただそれだけのことでした。

いや、それだけのことがいかにこの世で困難であるかを僕は知っています。僕はあるいは人生に対する期待があまりに大きすぎたのかもしれない。どことも知れずこの世に対する身に余るほどの期待を体の芯に刻みつけて、僕は生れてきました。人は僕のことを愚かだと言うでしょう。僕はその責め苦を負う覚悟でいます。

むろん負いきれるものでないことは僕自身あまりによくわかつているのです。

僕の半生は、渇き、求め、迷い、呻き、しかも何をも得られぬ地獄の道のりでした。僕は何に渇き、何を求め、自分がどこにいるのかわからなかった。僕の垂れ流した黒い血は、僕自身では拭いようもなく執拗に纏わりつき、融けた鉄が這うかのように抜け目ない執拗さで僕の肌を穿ち、焼いてゆきました。その傷が疼くたびに、僕は取り返しのつかない罪障が何であったかを思い知るのです。傷は深まりこそすれ癒されることはなかった。僕は何かを求め手を伸ばすたびに自らの傷を無残に切り裂き、その傷跡は幾重にも折り重なっていったのです。

その失明を漆黒だったとしか僕には形容できません。稚拙な表現をお赦しください。しかし僕はそれを黒にしか譬えようがないのです。それはすべてを飲み込む闇でした。闇は僕の生命を執拗に追跡し、その微かな片鱗さえ奪い去りました。人は僕を欲望のままに生きてきたと言うでしょう。けれど僕が本当に欲しかったものは砂の一粒すら手に入らなかった。求めれば求めるほど魂は渇き、涙は枯れて呼吸は

詰まり、僕は口にしたあらゆるものを泥のように吐きだしました。僕の体に流れる赤黒い穢れは鈍い音をたて乾いた土に堕ち、地面を陰鬱に湿らせました。僕は孤独でした。

「生まれてこなければよかった」。人は僕にそう言うかもしれない。しかし、この世に生れて一つたりとも欲しいものを手にしたことのない人間に、そんな勇気などあるでしょうか。僕の傷つき腐った心は自身の醜い存在の死すらも受け入れることができない。僕の魂は落ち葉にねっとりこびりつく泥土のようにいまだに何かに執着し、執拗にその得体の知れぬ何ものかに縋りつづけます。

黒を、僕に流れる黒い記憶を、拭えるものは何かあるのでしょうか。僕にもし夜明けがあるとしたら、それはどんなものなのでしょうか。この黒く腐った僕の血を捨て去ることでしょうか。それともその残酷な黒を一層愛することなのでしょうか。僕の存在にも一抹の希望があるならば、それは一体何だったのか。僕に朝というものがあるとしたら、それは何なのか。

曙光に照らされたところで闇が別の色になるわけではありません。それは消滅します。朝日が射すとき、黒は消滅するのです。闇は光に勝つことはできない。漆黒の闇はすべての色を飲み込みはするけれども、光が一条でも射せばその命は終わります。黒が黒から解き放たれる瞬間です。闇は非常に強い力をもっているけれども、それはひどく無力で受け身な存在なのです。深い闇も、濃密な黒も、その最も強烈なものでさえ、一条の光にすら勝つことはできない。

光は、黒い記憶をもつ僕の存在を消滅させるかもしれませんが。僕はそんな朝日を愛することができるようか。僕の心は夜明けをあまりに強く望んでいます。しかし僕自身は何より強く欲望するその光に触れれば、臓腑の奥まで灼熱の矢で貫かれることでしょう。けれど、その光に僕は近づきたかった。僕の欲望を切り裂く遠くの美しい星に触れたかった。僕の存在が自らの罪障のうちに露と消えるよりも、僕は光に刺されることを望んだのです。

僕を生み、僕を苛み、僕を呪う光。僕はそれでも、しかしそれだからこそ、夜明

けを望んだのです。僕は生まれつきあまりに愚かなのです。黒に触れた弱さにおいて、そして光を望む欲深さにおいて。僕の魂は呪われています。僕はそのようにしか世界を愛することができなかつた。僕が自らを痛めつけるとき、世界は美しく輝くのです。

僕はあなたに黒い衣をまとわせたい。黒を知らぬあなたの体に僕の地獄の道行を刻みたい。それはあなたにとても似合うから。僕の黒い布はあなたの輝く肌を一層艶やかに輝かせることでしょう。その黒い布はあなたに触れば破れるかもしれない。僕がついぞ一人では破ることができなかつた呪いを、あなたは一夜にして無に帰するのもかもしれません。僕の死と僕の夜明け。

僕は知っています。僕が死んだら泣くのはあなただけだということを。あなたは僕の苦悶とともに歩む。涙はいつしか僕たちの間に橋を架けるかもしれません。それは虹色かもしれません。

最後にひとつだけ告げておきます。漆黒の布が破られる前に、ひとつだけ言いお

いておかねばなりません。僕はあなたをかつてないほどに、そしてこれからもないほどに、激しく愛し、激しく憎むでしょう。あなたの命を握り潰して、その輝く肌から溢れる光を食りたい。あなたの朱色の唇をこの唇で貪り、その最後の一息までも絶やしたい。この世に黒い記憶があるかぎり、影をつくるあなたがこの世にいるかぎり、僕はあなたを渴望する。あなたに闇の衣を纏わせることができるなら、僕の存在が曙光の露と消えてもかまわない。